４４．Ｇ－０３

有意味語の発話のない児の意図伝達場面の増加を目指した症例

――INREAL アプローチを用いて――

言語聴覚士学科

【はじめに】

この度，有意味語の発話のない 3 歳男児の症例を担当させていただいた．INREAL アプローチを用いて児からの意図伝達場面の増加を目指し考察を行ったのでここに報告する．

【症例紹介】

3 歳男児．母からの主訴は「意思や感情を表出できない」であった．ADOS は 14 点で中等度の自閉傾向であるが確定診断は出ていない．家族構成は父，母，姉, 本児の 4 人. 現在に至るまで有意味語発話はない．

他機関の報告では，生活年齢 2 歳 7 か月時での新版 K 式発達検査結果は発達指数（以下，DQ）61，発達年齢（以下，DA）1 歳 7 か月，言語社会領域の DQ は 55，DA は 1 歳 5 か月であり，おおむね 1 歳前後の発達の遅れが見られた．

【初期評価と訓練目標】

視覚優位であり注意がすぐに切り替わり一つの遊びに集中が続かない．学生（以下，STs）が対象児に干渉しなければ一人遊びをする傾向がある．言語表出では「あう」［aɯ］「うん」［ɯN］「ううう」［ɯɯɯ］のみであり，そのほか自発的な要求の指さしなどのジェスチャーによる表出が見られた．Bates,E.のコミュニケーション段階では意図的伝達段階に当たる．言語理解では単語から 2 語文レベルで可能．以上のことから，長期目標を対象児からの「意図伝達場面の増加」とし，そのための方略として短期目標を「発声場面の増加」と設定した．

【訓練経過・結果】

訓練は対象児が遊びを選択し，玩具の写真を STs に手渡すという形式で計 7 回実施し，モデリングやパラレルトークなどの INREAL アプローチの技法を用いて対象児の遊びに介入した．対象児の表出や行動に合わせ，第 1 回～第 3 回では「発声の増加」，第 4 回～第 5 回では「STs の模倣ができる」，第 6 回～第 7 回では「はーいと手を挙げて返事ができる」という小目標を設けて関わり方を段階的に変化させていった．また全体を通して SOUL の姿勢をもとに対象児からの自発的な表出が増えるよう試みた．

その結果，①要求「て」［te］・拒否「ううん」［uun］・参加「あーい」［aːi］「はー」［haː］など文脈に沿った言語表出，②両唇音［b］［p］や母音の音声模倣，③ジェスチャーの模倣，④追いかけっこで STs の顔を見て逃げる，⑤起こした行為に対し相手の反応を見る（社会的参照），⑥自発的な片付け，⑦STs と協力して行う遊びなどが見られた．

【考察】

意図伝達場面の増加には①伝達したい意図と②伝達手段が必要であると考えられ，対象児においては①一人遊びからやりとりが発生する遊びへと移行するなかで要求や拒否の意図を持つ機会が得られたこと，②伝達のための発声やジェスチャーの模倣を繰り返し行ったことの二点が，要求を意味する「て」［te］や参加の表明の「あーい」［aːi］「はー」［haː］及び挙手といった表出につながったと考察する．

対象児の選択する遊びは，ビー玉遊びなどの一人遊び中心になるものから，追いかけっこやキャッチボールといった STs と協力して遊ぶものへと変化していった．その背景には，対象児にとっての STs の役割の変化があると考えられ，INREAL アプローチによる STs の段階的な関わり方の変化によって，傍にいる人から遊びを手伝ってくれる人へ，更に一緒に遊ぶ人へと推移していったと思われる．

【まとめ】

これまでの訓練を通し意図伝達場面の増加は見られたが，模倣や表出の促しによるものが大半を占めており，自発的な表出は十分とは言えない．自分の意思をもって意図の伝達を行うことが今後の課題であり，有意味語の表出にもつながるのではないかと思われる．

【文献】

1) 竹田契一，里見恵子：子供の豊かなコミュニケーションを築くインリアルアプローチ．日本文化科学社．東京，1994，6-22.

2) 玉田ふみ, 深浦順一：言語発達障害学第 2 版. 医学書院. 東京，2010，49-63.